

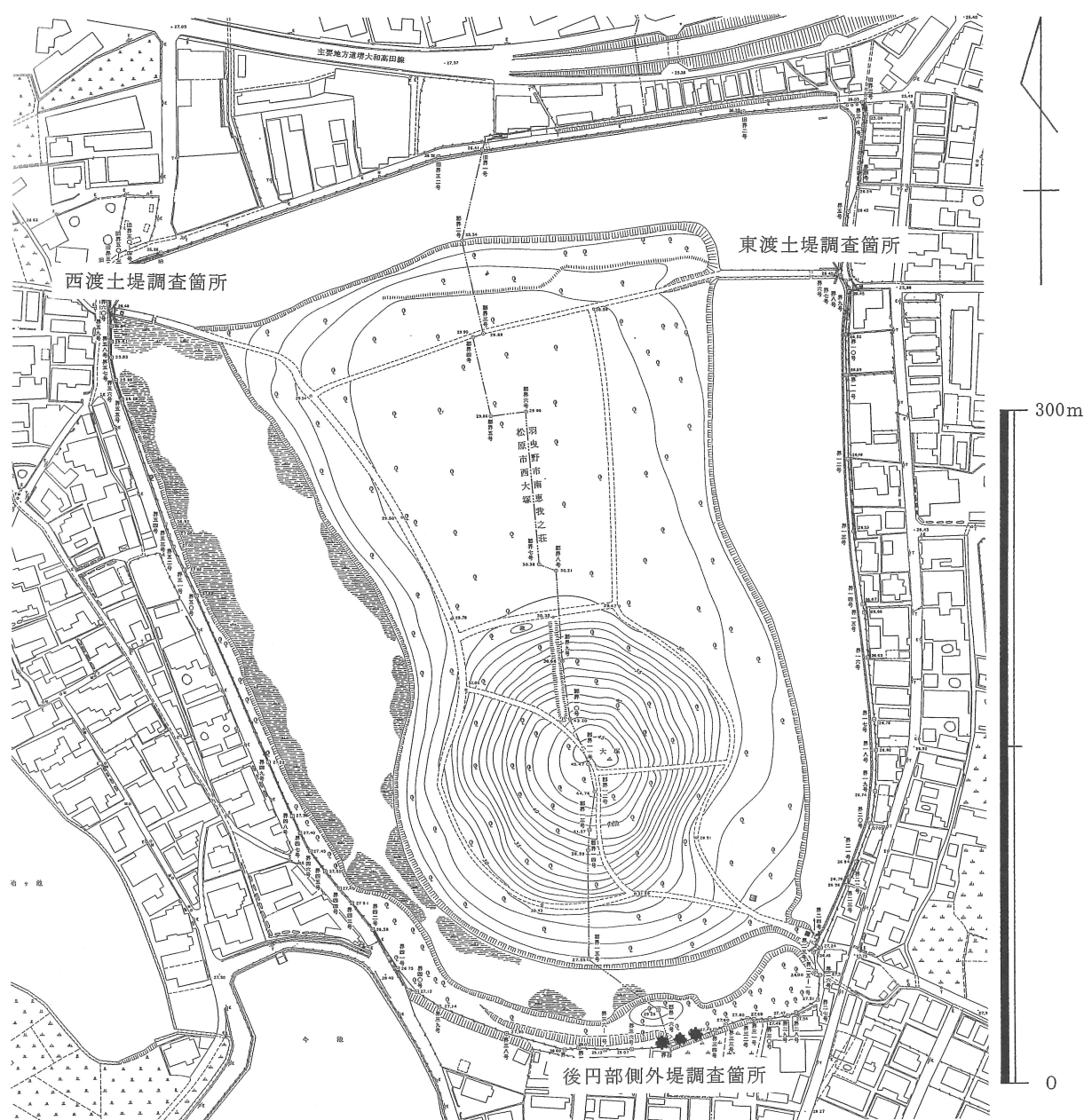
大塚陵墓参考地の渡土堤整備その他工事に伴う立会調査

大塚陵墓参考地は、大阪府羽曳野市と松原市の市境に位置する墳丘長約330mを測る前方後円墳で、後円部を南に向ける（第40図）。地形は南から北に向かって下っており、前方部両端に近い箇所東西それぞれに渡土堤が築かれており、水位の調整を図っている。水位の高い渡土堤南面は、東西とも既にコンクリートによる護岸工事が施されていたが、北面については濠水に洗われる状態にあった。この度、北面についての護岸工事後円部側外堤ではフェンスの改修工事が実施されることになったため、立会調査を行った。平成20年12月8～12日に西渡土堤の調査、平成21年1月13～17日で東渡土堤、及び外堤フェンスの改修工事に伴う調査を行った⁽¹⁾。

調査の所見は以下のとおりである。

（清喜裕二）

西渡土堤調査箇所 西渡土堤では工事箇所のうち約50mについて掘削および断面精査などをおこなった



第40図 大塚陵墓参考地 調査箇所位置図 (1/3000)

(第41図)。調査箇所的基本的な土層は上から昭和51年の渡土堤改修時の盛土(Ⅰ)、濠内堆積土(Ⅱ)、旧樋管設置時埋土(Ⅲ)、旧樋管に先行する不明落込埋土(Ⅳ)、地山(Ⅴ)となっている。地山の検出レベルはもっとも高いところで標高25.5mであり、周辺の地形からみてかなり浅い位置で検出されている。また、断面図作成箇所C面のやや東よりの箇所では地山を掘込んで設置された旧樋管を検出した。樋管の形状は断面形状が「O」字形となり、類例から判断すると近世以降のものと推測される。このことから西渡土堤の築堤は近世におこなわれたと考えたいところであるが、同一箇所での旧樋管に先行する不明落込が確認でき、今回検出された樋管に先行する樋管の存在する可能性も推測される。これらのことから西渡土堤の築堤時期は近世におこなわれた可能性があるものの、不明といわざるをえない。また、同様に時期は確定できないが、おそらく農業用水確保のために西渡土堤以外の箇所でも70cmほど地山を掘り込んでいることがB面の土層断面から確認できる。なお、西渡土堤調査箇所では遺物は検出されなかった。(加藤一郎)

東渡土堤調査箇所 東渡土堤の調査範囲は、東西延べ約60mに及ぶ(第43図)。土層は上から、表土(Ⅰ)、築堤の盛土(Ⅱ)、築堤以前の濠内堆積土(Ⅲ)、地山(Ⅳ)となる。地山は、余水吐より東側で標高約25mを測るが、余水吐を挟み西側で下り、周濠の中央付近では標高24.2m前後となる。面として確認できていないが、ほぼこの高さで水平な濠底と推定される。濠底である地山面は墳丘に向かって非常に緩やかに立ち上がっていく。この立ち上がりは、最終的には高さにして標高約26.3m、すなわち、前方部の墳丘上面にそのままつながっていく。濠底には、厚さ0.3~0.4mの濠内堆積土があり、その上に約1.8mの厚さをもって大きく2層からなる盛土で築堤されている。また、この盛土に先だって、北から南に僅かに下る傾斜をもつ、板材4枚を組み合わせた断面長方形の樋管が設置されている。樋管の下は溝状に掘られ、粗砂の多い粘質土が充填されている。

後円部側外堤調査箇所 後円部側外堤の工事範囲には、事前に3箇所のトレンチを設定してフェンスの基礎埋設箇所の調査を行った。東から1~3とする(第42図)。1・2と3は地表面で比べると、3が約2m高く、境界外の隣接地とほぼ同じ高さである。一方、1・2は隣接地より一段低い平坦地となっている。2は3を設定した高まりの裾に設定している。1・2は同じ堆積状況を示す。表土(Ⅰ)と粘質土や粘土を主体とする幾層かの盛土(Ⅱ)の下に地山(Ⅲ)が検出される。地山も掘り下げた範囲内で3~4層に細分できる。3も盛土の占める割合は高いが、1・2に類似する堆積状況を示している。地山の検出レベルを比較すると、地表面では約2mの高低差であるが、地山上面では約1mとなっている。また、2では盛土が明らかに3を設定した高まりに向かって上がっていることから、地山の高まりに加えて厚い盛土がなされたことがわかる。

なお、遺構・遺物は確認されていない。

遺物 遺物は東渡土堤の盛土内(Ⅱ)から5点が出土した。また、前方部正面裾で1点を採集している。磁器碗の破片4点と陶器播鉢の破片1点である。いずれも小片であるが、磁器は18~19世紀頃のものと考えられる。前方部における採集品は土師質の製品ではあるが、摩滅が激しく器種は不明である。

なお、前方部正面裾は、濠水の水位が落ちていたため踏査を行った。遺物はそれなりに目に付く状況であったが、明確な埴輪片を確認することはできなかった。

以上の結果を踏まえ、工事は予定通り実施した。

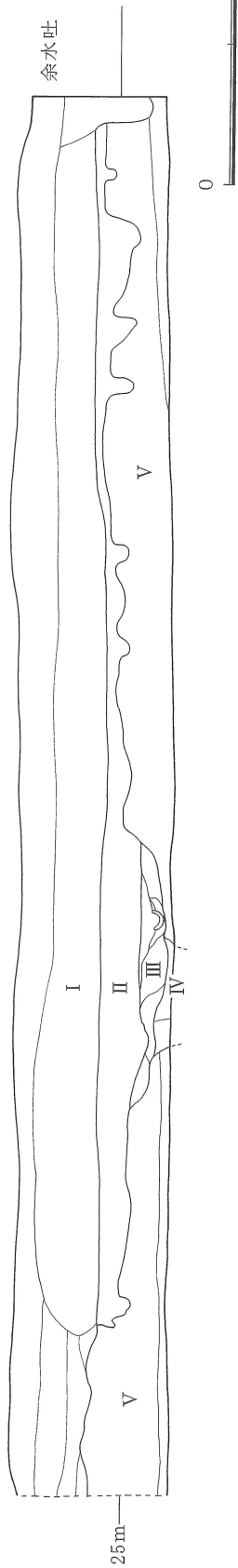
(清喜)

これまで本参考地は、特に前方部が低平であることの要因をはじめ、周濠も含めた構造や規模など不明な点が多かったが、今回の調査で新たな知見を幾つか得ることができたと言えよう。

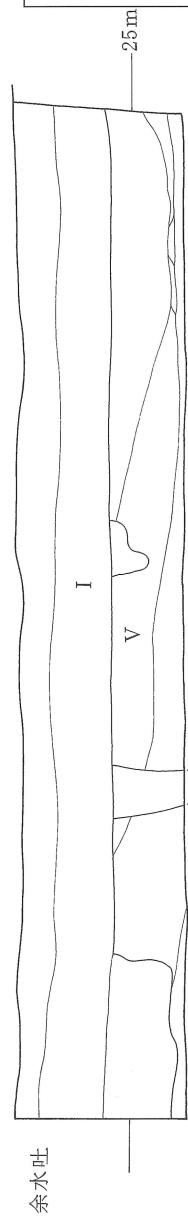
西渡土堤調査箇所では、断定はできないが検出された樋管の断面形状から築堤が近世におこなわれた可能性があることを指摘できる。また、濠内の地山のレベルが非常に浅いことが注目される。同様のことは過去の後円部付近の調査でも指摘されており⁽²⁾、本参考地の周濠は非常に浅かった(もしくは存在しなかった)か、外堤がすでに削平されてしまっているものと思われる。

東渡土堤調査箇所では、検討できる資料は少ないものの磁器などから築堤の時期は19世紀に入ってからである可能性が考えられる。周濠については、地山の立ち上がりが注目される。現在の裾から墳丘本体にかけ

南壁B面



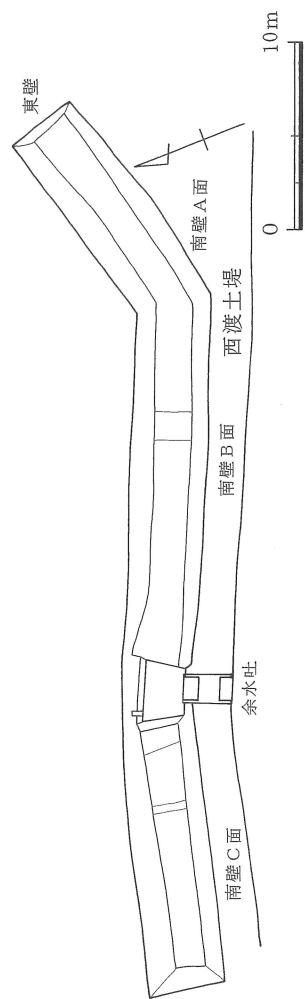
南壁C面



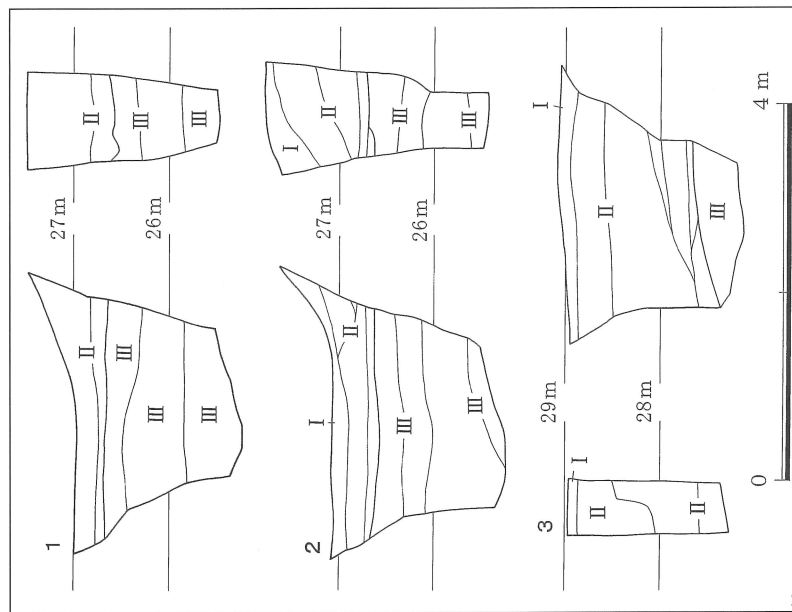
東壁



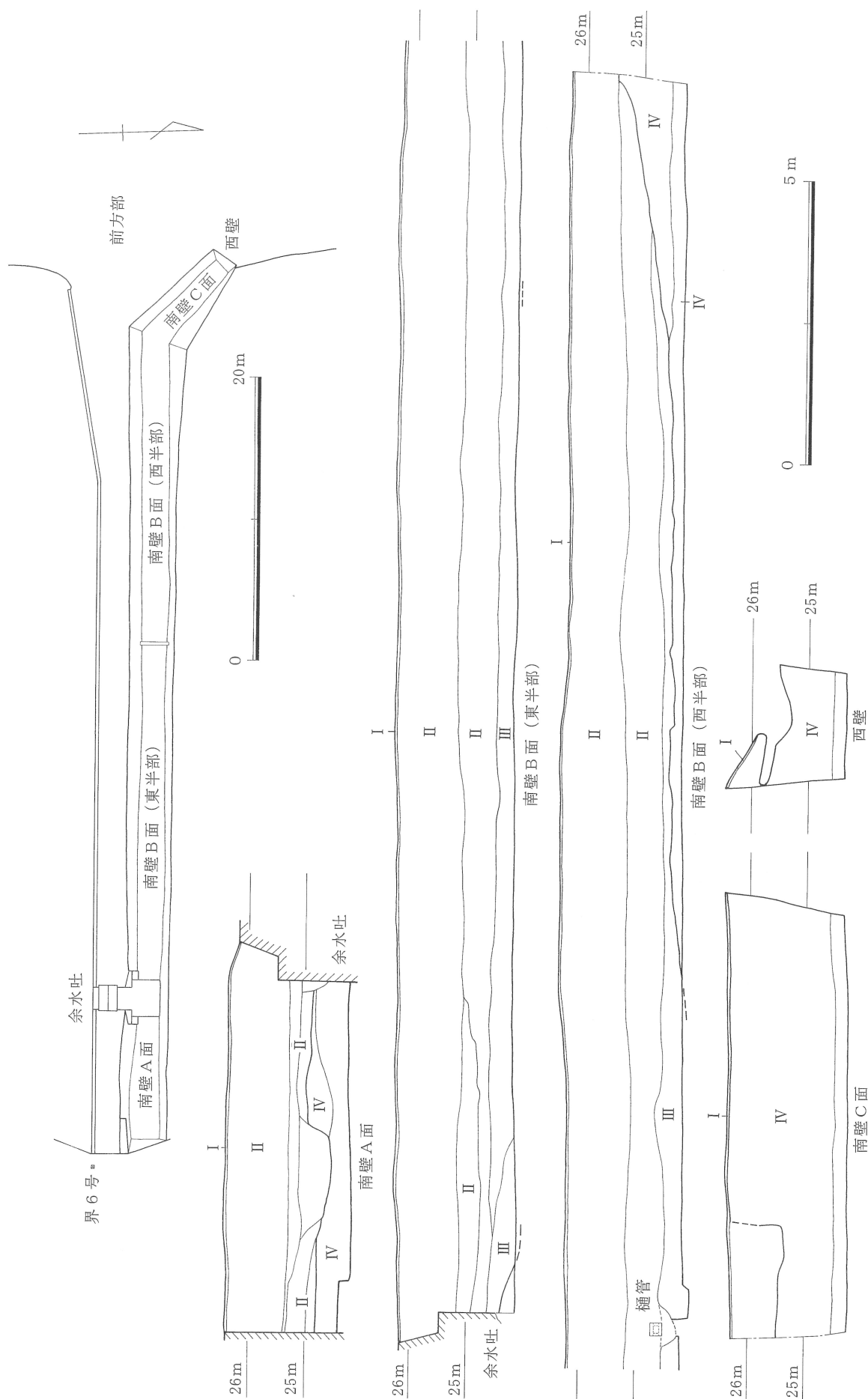
南壁A面



第41図 大塚陵墓参考地 西渡土堤調査箇所平面図 (1/400) および断面図 (1/100)



第42図 大塚陵墓参考地 後円部側外堤調査箇所断面図 (1/80)



第43図 大塚陵墓参考地 東渡土堤調査箇所平面図 (1/400) および断面図 (1/100)

てが地山であることは、前方部の墳丘を削平して周辺に押し広げた可能性を否定する。少なくとも、東渡土堤周辺の墳丘は地山であり、それが前方部全体に及ぶとすれば、現在の墳丘裾はおおよそ本来の形状に近く、規模も本来のものに近いと推定される。そうだとすると、現在の低平な前方部は、墳丘を削平した土のほぼすべてを墳丘外に搬出したのでない限り、前方部が後円部に見合うだけの高さを本来もっていたと考えることは難しい。

なお、東西の渡土堤については地形図からうかがえる墳丘への取付き方や今回の所見などから判断して、必ずしも同一時期の築堤ではない可能性も考えておく必要があると思われる。

外堤調査箇所は、陵墓地形図を一見したところでは、隣接地に比べて一段低いこともあって、周濠を埋め立てたかのように見えていた。しかし、調査の結果、地表下0.3～0.4mほどで地山に到達することがわかった。これにより、一帯の平坦地は周濠が埋め立てられたのではなく、そもそも後円部周囲の周濠の幅は著しく狭いものであった可能性が高まったと言えよう。 (清喜・加藤)

註

- (1) 調査中には羽曳野市教育委員会の河内一浩氏、松原市教育委員会の芝田和也氏、岡本武司氏よりご指導・ご教示を賜った。記して謝意を表したい。
- (2) 土生田純之「河内大塚陵墓参考地のヘドロ調査」『書陵部紀要』第40号、宮内庁書陵部、1989年。